乳児のいる家庭におけるケガ対策としての家庭環境の調整

○小島康生¹・水野里恵¹・富貴田智子²・矢野（松岡）円郁³・塚田みちる⁴

(¹中京大学・²ひらしば幼稚園・³名古屋女子大学・⁴神戸女子短期大学)

キーワード：乳児、ケガ対策、家庭

Accident prevention at home in families with infants

Yasuo KOJIMA¹, Rie MIZUNO¹, Tomoko FUKITA², Madoka YANO (MATSUOKA)³, and Michiru TSUKADA⁴

(¹Chukyo Univ., ²Hirashiba Kindergarten, ³Nagoya Women's Univ., ⁴Kobe Women's Junior College)

Key Words: Infants, Accident prevention, Home

目 的

われわれは常に、快適な生活を実現すべく、すまいの構造を合理的、機能的に配置しなおし、必要に応じて新しい物を導入したり、物の置き場所を換えたりといったことを繰り返している。つまり家屋内のどこに何が配置されているかは、住人の生活様式やメンバー構成、メンバー各々の発達段階等と密接に結びついているといえよう。

小さな子どものいる家庭では、親は子どもの事故やケガの対策として様々に環境調整を行っている。本発表では、乳児のいる家庭において、具体的にどのような環境調整がいつ頃行われ、それがどのような理由に基づいてのことなのか、その基礎的な資料を提示することをめざしている。

方 法

【協力者】名古屋市内に在住し、2010年1月1日～12月31日までの間に第一子である子どもを出産した母親500名に対し、自宅宛に質問紙を郵送し、回答のち返信するよう依頼した。500名中275名から返信があり（回収率55%）、これらの協力者には後日、謝礼として図書カードを郵送した。子どもは5ヵ月齢～17ヵ月齢までの範囲であった。

【質問紙の内容】質問紙は、子どもの気質、一日の生活スケジュール（起床・睡眠の時間、昼寝の頻度、時間など）、家庭環境（母乳／ミルク・離乳食・おやつ等の与え方、テレビ・ビデオの視聴のさせ方、玩具選びの基準、家庭内での事故・ケガ対策、外出頻度など）から構成されていた。

【本発表で扱うデータ】家庭内での事故・ケガ対策についての分析結果を報告する。「何のために、どの場所でどんな対策を取っているか」をできるだけ具体的に記述してもらった。最大で4つまで記入できるよう回答欄が設けられていた。全記述数は666、一人あたりの平均記述数は2.42（SD=1.50）、であった。

【分析】「どの場所ないし構造に関する記述か」、「どのような事故・ケガを想定してのことか」、「どのような対策か」の3点について記述内容を分類し、子どもの月齢毎に（6分類：5,6ヵ月、7,8,9ヵ月、10ヵ月、11,12ヵ月、13,14ヵ月、15,16,17ヵ月）記述者の割合を算出した。

結 果

「場所、構造」については、(1) 床、階段、扉、柱など家屋自体の構造に関係したもの、(2) 台所、浴室、トイレ、玄関、ベランダなど特定の部屋や場所、(3) 家具類（たんす、収納棚、ベッド、ソファ、テーブル）、家電（テレビ、冷蔵庫、ストーブ、加湿器、炊飯器、ガスコンロ）、コンセントなど、大型のもの、ないし場所の移動が容易でないもの、(4) ごみ箱、扇風機、座イスなど場所の移動が容易な小型の日用品、(5) 小物（文具類、ハサミ、ゴミ、ホコリ）に分けられた。このほか、具体的な場所やものでない(6) 引き出し、角、割れるものなど、形状に言及したものもあった。

次に、以上の場所、モノ、構造が子どもにどのような事故

やケガをもたらすと親が認識しているかを分類し、子どもの月齢による違いをみた。指でつまめる程度の小さなものを「口に入れる」、「誤飲する」とに関する記述は7～9ヵ月齢でピークを迎え、それ以後、減少することがわかった。「触る」とに関する記述は、11ヵ月齢以降17ヵ月齢まで増加しつづけた。「打つ、ぶつかる」は10ヵ月齢でピークを迎え、その後、減少した。

「対策」については、触ると危ないと親が判断したものを「遠ざける、しまう」という記述が7～9ヵ月齢でピークを迎え、それ以後、減少した。歩行器に入れる、ベビーサークルに入れるなど「子どもの行動・移動の制限」は、8～12ヵ月齢に限定してみられた。ベビーゲートを設置して「近づけなくする」などの記述は、7～9ヵ月齢にかけて増え、10ヵ月齢でいったん減少したのち1歳以降ふたたび増加した。引き出しや戸棚などを「開けられなくする」という記述は1歳頃にかけて増加した。「突起、穴、スイッチ等をふさぐ」は先の2つほどは多くないものの、どの月齢においても2割程度みられた（図1）。

考 察

移動能力がさほど高くない9ヵ月齢頃までは、誤飲を恐れて指でつまめるぐらいの微細なものを「遠ざける、しまう」などの対策が比較的良好に取られていた。その後、移動能力が高まるにつれ、子どもの行動・移動を制限したり、障壁を作って近づけなくするといった対策が増える傾向にあった。こうした試みは、いわば大人の生活世界から子どもの侵入を遮ることによって子どもの安全を保障するものといえよう。おそらく親はこれ以後、緩やかに（あるいは大胆に）子どもを大人の生活世界に導き入れるか、もしくは子どもの行動範囲をあくまで制限しつづけるかと思われるが、その個人差（つまり親が子どもにどのような環境を提示していくのか）が子どもの自己制御の発達にどのような影響を与えるのかを、さらなる追跡データから明らかにしていきたいと考えている。

図1. 子どもの月齢毎にみたケガ対策

※本研究は平成23年度科学研究費補助金（基盤研究(B)：課題番号21330156）による助成を受けた。